

はじめに

循環ワーカー養成講座は、環境問題と循環型社会に関する基礎的な知識と新しい視点を提供する連続講座です。2010年度のテーマは「循環型社会と原子力」。

もちろん、このテーマの企画段階では、2011年3月11日の東日本大震災で、福島第一原子力発電所がこのような深刻な事態になるとは、誰も予測していませんでした。しかし、漠然とした不安は、多くの人が長い間持ち続けていたことも事実です。そんな不安の想定を最大級、いや最悪の想定をはるかに超えた事態が、現在進行形で起きています。

今回の連続講座の中で反対派、推進派、中立派、それぞれの講師のお話をお聴きするなかで、原子力発電や核燃料サイクルの実態と抱える問題の論点が私たちにも少しずつわかってきました。しかし、それらはあくまでも平常時の議論でした。いま、取り返しのつかない事故が起きた後に、各講師の講演内容を読み返すと、また違った示唆が得られます。

原子力資料情報室共同代表の山口幸夫氏は、連続講座の冒頭にふさわしく循環型社会のイメージからお話いただき、核燃料サイクル政策の転換に向けてのご提言で締めていただきました。われわれは真摯にこの提言を検討し、循環型社会に向けて大きく舵を切りなおさなければなりません。グリーン・アクション代表アイリーン・美緒子・スミス氏からは、世界の原発の動向や趨勢についてお話いただきました。原発は温暖化対策として間に合わないどころか、いまや日本の惨事を契機に世界は脱原発の動きを加速させています。

元原子力発電環境整備機構（NUMO）理事の増田純男氏からは高レベル放射性廃棄物の地層処分についてうかがいましたが、使用済み燃料がこれほどわれわれに脅威を与えるものとは、この事故まではわかりませんでした。東洋大学の渡辺満久教授には、変動地形学の観点から原子力関連施設周辺に大地震を起こしかねない活断層が多いことを指摘いただきました。いままさに原発震災の恐怖が現実のものとなりました。この国で原子力発電を続けるのであれば、このままでよいはずがありません。

原子力安全機構技術顧問の松本史朗氏からは核燃料サイクルと「深層防護」「多重防護」「停めて、冷やす、閉じ込める」という原子力施設の安全確保の仕組みについてご説明いただきましたが、やはりいまとっては空虚に響きます。むしろ、「技術は社会環境の変化に伴い修正しなければ死んでしまう」という指摘が的を射ています。そして、足利工業大学学長の牛山泉教授からは、日本の再生可能エネルギーのポテンシャルは原子力発電所の発電量と同程度はあるとの指摘をいただきました。循環型社会は、「再生可能な資源で暮らす」ことが原則です。枯渇性資源のウランに頼り、将来世代に禍根を残す原子力から、再生可能エネルギーへの転換が、我々の世代がなすべきことであり、人類の未来への希望です。

連続講座の内容を踏まえ、受講した会員有志で議論し、循環研としてまとめた見解を巻末に掲載しました。ただし、これも東日本大震災直前のものです。

最後になりましたが、講師の方々、ご後援、ご協賛いただいた方々に心から感謝申し上げます。

2011年3月

NPO 法人 循環型社会研究会 事務局担当理事 久米谷 弘光